

在間進先生を偲んで

Dem Andenken Prof. Susumu Zaimas

藤縄 康弘

東京外国語大学大学院教授

Yasuhiro FUJINAWA

Tokyo University of Foreign Studies, Professor

1979年から2008年まで、30年という長きにわたり本学ドイツ語学科で教鞭を執り、ご退職後も独和辞典の編纂やドイツ語学習者のための参考書・問題集・単語集等の制作に精力を傾注していらした在間進先生が、2023年4月13日、78歳で突如としてこの世を去られた。数多くの学生を指導し、彼らの寄稿を通じて本誌とも浅からぬ縁で結ばれていた先生のあまりにも早い旅立ちを心から悼むとともに、生涯研究者・教育者を貫いた在りし日のお姿を偲ぶことで、残された者たちにとって道しるべとなるものを見つけ出したい。

在間先生は本学在職時、月曜5限に大学院の授業を開いていた。その場に私はじめて参加したのはまだ学部生のころだった。専攻語の授業で私が質問したことがよほど気に入られたのか、授業後に先生が「よかったら大学院の授業に顔を出してみないか」と声をかけてくださったのがきっかけである。この授業には、本来の院生だけでなく、修了生や先生を慕う同輩・後輩の先生方が大勢集っていた。在間先生はまだ新進気鋭だったこともあり、門下生たちを高所から超然と教え導くというよりも、彼らと同じ目の高さで議論をする姿勢に徹していた。知ったかぶりは一切しない。若い研究者の卵が背伸びをして持ち出すどんなに高名な学説に対しても、首尾一貫しないところがあれば悉くそこを突いたし、それに対する答えが通り一遍に留まるようであれば、それを決してよしとせず、ますます鋭く追求した。一方、追求を受ける院生らも辛抱強かった。たとえその場では一旦引き下からざるを得なくても、次回には別の反論材料を用意して新たに論戦を挑む。すると、在間先生は……、というサイクルを何度も目のあたりにしたものである。

とはいえ、在間先生は院生らに自身の意見を押し付けることはしなかった。自らに対する批判も含めて言い分があれば、誰にでも何でも言わせていた。こうし



て喧々諤々の議論が絶えず繰り広げられる研究室は、おのずと活気と熱気に満ち溢れていた。このような環境の中で、私は「自分の頭で考えること」を何よりも大切にする先生の姿勢を学ばせていただき、それを研究上の「型」として身につけさせていただいたのだと思う。

在間先生のこうした教育スタイルは、安易に権威を奉らないという信条に基づいていたと思われる。この信条は学外でも一貫していた。先生は長らく日本独文学会の理事をお務めになり、その時期は私の院生時代とも重なったのだが、その時期に先生は、学会のいくつかの悪しき慣例を断つことに貢献された。たとえば、研究発表会で学生が発表を行うのは、今日ではごく普通のことになっているが、当時は前例がなく、申込みすら憚られるような雰囲気だった。それに正面から異を唱えたのが在間先生だった。先生は（そのころご本人から直接伺ったところによれば）、「研究内容が未熟だから落とすのは当然だが、単に学生だからという理由で門前払いにするのはおかしい」ということを理事会で粘り強く主張なさったようである。

また、日本独文学会の語学ゼミナール（Linguisten-Seminar）も、在間先生が実行委員長になってからいまのかたちが定着した。それまでの語学ゼミは、「本場ドイツ」（当時は隔年で西ドイツと東ドイツ）から「偉大な」先生を講師にお招きし、その講話をひたすら「ありがたく」拝聴するような合宿だったらしい。こうした卑屈とも言える態度は、独文学会に限らず、明治以来の日本社会のいたるところで、西洋崇拝の現れとしてありがちなことだった（あるいは、いまなおありがちなことだ）と思うが、そこに在間先生は、日本側参加者による研究発表という思い切った企画を追加した。そうして日本側からも成果を発信することで、日独間の対等な研究者交流の実現を目指されたのである。それから30有余年の歳月が経ち、語学ゼミは2024年、第50回の節目を迎えた。いまでは多くの日本側参加者が自発的に研究発表を行い、その中には本学関係者を含めて若手が少なくない。しかも、そうした若手の発表がときに招待講師からも真剣な質問や反論を引き出すことがある。そのような場面に遭遇するにつけ、在間先生の撒いた種が着実に芽吹いていることを実感するとともに、先生への感謝の念を新たにするのである。

研究者としての在間先生は、進取の気風に富んだ方であった。学界への出世作となった名詞化に関する論文を発表した1970年代は生成文法と真摯に向き合っておられたが、その後、1980～90年代になると、今日的視点から「認知言語学」と呼ぶべき研究で先駆的な業績を上げられた。さらに2000年代には、コーパスを活用した研究の牽引者となった。研究者には大きく言って、ひとつのことをと

ことん追求する「この道一筋」タイプと、次々に新機軸を打ち出す「変幻自在」タイプとがある。一概にどちらがよいと言えるものではないが、方法論的に絶えず変化を遂げていった在間先生の場合、一見すると後者のタイプのようである。それでいて、その変化の根底には一貫して「ドイツ語」があったこともまた間違いない。在間先生は、ありきたりで単純な二者択一にやすやすと落とし込まれるような方ではなかったのである。

そんな在間先生が、かつて同窓会のコラムで「真理」についてこんなシンプルなことを仰っている：

「なせば成る，なさねば成らぬ，何事も」—ありふれた言葉だが，真理に思えてならない。（『東京外語会報』第99号，2003年11月）

これは、先生にしてみれば、当時、本学副学長として教育改革に取り組む中でふと抱いた雑感に過ぎなかったものであろう。しかし、私には、これが研究にも大いに通じているように思われる。ここで先生は「真理が、何もせずずっとそこにある、とあてにしているはいけないよ」と親身に諭してくださっているかのようだ。と同時に、真理のために果たして何をなすべきかは、各自が「自分の頭で考えなさい」と叱咤激励しているようでもある。

その意味でこのお言葉は、ドイツ語学に携わる者であれ、文学に携わる者であれ、はたまたそのいずれにも収まらない新たな領域を開拓する者であれ、我々あとに続く研究者（の卵）たちに在間先生が図らずも残してくださった貴重なご遺言である。在間先生には、我々の活動をこれからも草葉の陰で温かく見守っていただきたいと切に願う。



在間 進先生

略 歴

1969年 東京外国語大学大学院外国語学研究科 ゲルマン系言語専攻 修士課程修了
 1969年 熊本大学法文学部 助手
 1971年 同 講師
 1973年 Institut für deutsche Sprache 専任研究員
 1976年 東京都立大学 助教授
 1979年 東京外国語大学外国語学部 助教授
 1991年 同 教授
 2008年 同 定年退官
 2023年 4月13日 死去

主要論文・著書・翻訳

1975年 „Zum Problem der Nominalisierung im Deutschen und im Japanischen“, 『ドイツ文学』 55号, 日本独文学会, 120-134頁。
 1987年 „Verbbedeutung und syntaktische Struktur“, *Deutsche Sprache*, Heft 1/1987, S. 35-45.
 1989年 „Aktivität und Resultativität transitiver Verben im Deutschen“, in: Fries, U./M. Heusser (Hgg.), *Meaning and Beyond. Ernst Leisi zum 70. Geburtstag*, Tübingen: Gunter Narr, S. 215-222.
 1990年 「ドイツ語の動詞と統語構造」『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』

国広哲弥教授還暦退官記念論文集編集委員会編, くろしお出版, 235-252頁。

1992年 『詳解ドイツ語文法』大修館。
 1994年 「統語構造の意味機能」『ドイツ語学研究 2』千石喬, 川島敦夫, 新田晴夫編, クロノス, 133-146頁。
 1999年 „Satzsemantik vs. Valenztheorie“, in: Nitta, H./M. Shigeto/G. Wienold (Hgg.): *Kontrastive Studien zur Beschreibung des Japanischen und des Deutschen*, München: Iudicium, S. 133-144.
 2001年 „Valenzvergleich und ‚valenzbasierte‘ Eigenschaften des Deutschen — im Vergleich mit dem Japanischen“, in: Schröder, H./M. Gonzalez/P. Kumschlies (Hgg.), *Linguistik als Kulturwissenschaft. Festschrift für Bernd Spillner zum 60. Geburtstag*. Frankfurt u.a.: Lang, S. 297 -306.
 2002年 「ドイツ語研究の方法論」『新しいドイツ語文法構築への試み—命題の成立条件とその周辺—』(日本独文学会研究叢書011号), 日本独文学会, 井口靖編, 60-68頁。
 2004年 『エクセル独和辞典 新装版』初版, 郁文堂。
 2021年 『新アクセス独和辞典』第4版, 三修社 (1999年, 初版)。